



目次

名古屋大学所蔵古文書の現況 高木家文書を中心に（秋山晶則）	1
坂田昌一記念史料の展示について （三田一郎）.....	4
お知らせ	4
海外衛星放送で世界情報を知ろう	5
平成10年度特別図書一覧	5

名古屋大学所蔵古文書の現況 —高木家文書を中心に—

秋山晶則

名古屋大学には、文・法・経・医・附属図書館の5つの部局に、江戸時代を中心とした10万点をゆうにこえる貴重な古文書が分散所蔵されてきた。これらの事実は、関係者を除けば、キャンパスの中でも余り知られていないようである。代表的な文書群には、朝廷官人真継家文書、鳴海下郷家文書、尾張藩重臣滝川文書（以上、文学部）、尾張藩年寄大道寺家文書（経済学部旧蔵、古川総合研究資料館架蔵）、旗本高木家文書、伊勢大湊角屋文書、海東郡長須村庄屋岡田家文書（以上、附属図書館）などがある。うち、整理・目録化されたのは、真継家文書（中世部分）及び滝川文書と後述の高木家文書のみであった。そのため、学内にどのような古文書がどれくらい所蔵されているのか、その全貌を知ることは不可能で、一部を除いて利用に供されることもなかったのである。

しかしこうした現状は、大学の果たすべき社会的役割が鋭く問われる中、国民の知る権利にも深く関わる問題として批判的に検討されることになった。そして、開かれた大学創りを進める一環として、各部局で積み重ねられてきた成

果をふまえ、1991年より学内古文書整理プロジェクトがスタートしたのである。目下、年代測定資料研究センターを中心に、文書群の性格や伝来を精査した上で、順次悉皆調査による目録化が進められつつある（既に、大道寺・真継・下郷家文書の各目録を刊行）。ちなみに、大道寺家文書は、このプロジェクトによって発見されたものの一つである。ここでは、プロジェクトの中心に位置する附属図書館所蔵の高木家文書について、あらためてその概要を紹介するとともに、現在の整理状況と二三の課題について述べることにしたい。

高木家文書は、総点数約7万7千点と見積もられている一大古文書群である。旧蔵者の高木家は、関ヶ原合戦直後の1601年、近江・伊勢と国境を接する美濃国石津郡時・多良両郷（現養老郡上石津町域）に所領を得て以来、西・東・北の三家に分かれて同地を支配し、幕命により木曾三川治水を担当した旗本である。江戸に常駐した一般の旗本とは異なり、知行地に居住して参勤交代を行い、交代寄合美濃衆として大名並の格式を与えられていた。維新後も同地に居

住し、学区取締や郡長等の公職を歴任している。

本文書は西高木家に伝来したが、敗戦後、一部が市場に流出したことで散逸が危ぶまれるようになり、当時文学部教授であった中村栄孝氏らの尽力で1949年と57年に分けて附属図書館に収蔵されたものである。その後いくたびか整理が試みられたが果たせず、1971年から始まった全学事業により、5万2千点を収める目録5巻が刊行され、ようやく文書群の全体が窺えるようになった。内容上の大きな特徴は、木曾三川治水、領地支配、財政等の家政、近代地方政治、のそれぞれに関する文書が豊富に含まれていることである。周知のように、旗本史料は幕府瓦解とともにほとんど散逸してしまっただけに、これほどの規模と内容を備えた本文書の持つ史料的价值は測りしれず、整理・公開が進められたことで、学界はもとより社会的にも注目を浴びるようになった。

その中で、最も精力的に研究されてきたのは、木曾三川流域住民が持続してきた水とのたたかひの歴史と、在地性を維持した旗本領主支配に関するものであった。加えて近年の傾向に触れれば、自然との共生が問われるなか、河川という自然にどう人間が関わってきたか、伝統工法の再評価も含めて治水史料に新たな関心が寄せられつつある。また、文書群のスケールメリットを活用して、文書様式や印章などに注目した研究もなされており、さらに、和紙の紙質や墨・印肉など、文書自身が「もの」として有する豊かな情報を資源化することも期待されている。

こうした研究の土台を据えたのが、先にみた全学事業である。しかしこの事業は、文書群が

当初予想の5万点を大幅に上回る規模であったため、時間的制約から、書状類2万5千点を整理対象から除外した上で、目録刊行後の82年に一旦打ち切られた。その際、書状類が外された理由は明瞭である。我々が交わす私信を思い浮かべていただくと分かりやすいが、当事者間の了解事項を省略し無年号で記述されるのが一般的で、整理にあたっては他の文書に比べ、表題付与や年代決定の考証に時間がかかるためであった。一方でそこには、当事者しか知りえない情報や、重要な史実の発見が期待できるのであるが。加えて、高木家文書のような文書群にあつては、一点毎の文書は、それ自体としても貴重な歴史的遺産だが、群全体のなかに位置づけられてはじめて文書の本質をさししめず場合が少なくない。既整理文書を真に活かす意味でも、文書群全体の把握につながる未整理文書の整理が求められていた。

そこで今回のプロジェクトでは、文書の「原秩序尊重」を原則に、残された未整理文書2万5千点の悉皆調査を開始した。後述のように保存状態が悪いものが多いため、文書補修を並行させながら、現在まで書状約1万3千点余の整理を終えている。以下に記すのは、特に点数が多かったジャンルで追加把握された特徴の一部である。

一つは家政の分野である。その中で、尾張藩をはじめ周辺大名（含家臣）との交際をリアルにつかむことができた。こうした領主相互の日常的関係の究明は、集権的に編成されることで実現されていた個別領主権の問題、ひいては幕藩権力の特質解明にもつながろう。つぎに注目しておきたいのは、多数の女性書状である。中には、彦根藩家老に嫁した女性のように、重要な政治情報を提供するものもあり、武家女性の歴史に好素材を提供する。また、これは地理的位置も影響してのことであろうが、新たに公家との交際や紛議の事例が多数確認された。幕末に向けた朝廷の政治勢力化などが測定可能なデータである。

二つには、財政分野である。一例をあげれば、領主財政窮乏化への対応について、木曾三川治水による縁故関係を利用しての他藩からの借入



普請目論見絵図 (1753年)

や、西濃・北勢といった川筋支配場所住民を対象とする金融講の経営など、まさに治水の役儀が財政維持と密接不可分に連関していたことが把握できた。

三つには、維新後の新政出仕・学区取締・郡長の項目いずれもで、既整理分を超える点数を追加し、高木家の維新时期およびその後の活動を豊富化できたことである。このほか、宝暦治水での内藤十左衛門切腹一件や尾張藩儒秦鼎関係文書等のまとまった情報も追加することができ、今後の整理にさらに期待がかけられている（以上、詳細は「調査報告書」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』7～14参照）。

しかし、当該文書群の整理を完了させるには、相当長期にわたる事業の継続が必要と思われる。当面の課題としては、まずは整理水準を向上させるため、既整理分の情報を有効に活用するデータベース構築や学外関係史資料の調査があげられる。これらは、学内外に向けた情報発信や研究支援を促進する環境整備にもつながるものである。

それとは別に、長期的課題として重要なのが、保存と利用の問題である。保存と利用には相反する面があり、地球資源や環境問題と同じ位相にあるとも評される。それは、未来の人々に対して重大な責任を負う意味において共通するからである。

さて、高木家文書の場合はどうであろうか。既整理文書は、空調及び消火装置を備えた貴重書室に保存されており、この点では恵まれた環境にある。しかし、過去に入れられた酸性紙封筒・箱のままであり、中性紙のものに差し替える必要がある。また、整理途上のもは通常の書架上に分類されており、防塵等への配慮が課題となる。このほか、閲覧頻度が高い文書については、写真判や電子媒体（画像DB等）による利用を可能にし、できるだけ原本保護を講じる必要がある。

高木文書の保存と利用について考えるとき、深刻なのが補修の問題である。未整理文書のうち書状類は、継目糊がはがれ分断されたものが多く、可能なものは継いで復原するなどしてきたが、虫損の激しい場合等には十分対応しきれ



御用日記

ていない。加えて既整理文書も、そのほとんどが補修を必要とする状態にあるとあってよい。閲覧希望があっても、文書状態から認められない場合も少なくない。なかでも、1750年から1870年までの全期間、公的事件を中心に家臣が筆録した「御用日記」（333冊）は、高木家をめぐる情報の宝庫であるが、大部分が虫損・湿害のため板状に固着するなど、利用に耐えない状態である。また、文書群中でも一番目をひく、宝暦以後の治水役務に用いた畳二畳ほどもある木曾三川流域大絵図（軸装）も、八双及び天部が剥落するなど、利用不能である。このように、文書群全体にわたって傷みが激しいものが多く、保存と利用を考えた場合、早急に裏打ちなど適切な補修を行う必要に迫られている。

附属図書館には、このほかにも、先述の岡田家文書（推定1万5千点）など、未整理の史料群が眠っている。これらも含め、人類共有の貴重な歴史情報資源である古文書資料を所蔵するうえは、何よりも整理を完了させ、保存と利用という困難な課題を見据えつつ、未来への橋渡しを着実に進めていくことが求められていると考える。

（あきやま まさのり・年代測定資料
研究センター）

高木家文書は、原則として毎週火・水曜日が閲覧日となっており、閲覧等の利用が可能です。事前にお問い合わせください。

TEL 052 (789) 3697 整理室
/ 3678 受付カウンター

坂田昌一記念史料の展示について

三 田 一 郎

平成10年12月12日、名古屋大学附属図書館と名古屋大学理学研究科の合意によって、理学研究科物理学教室に所属する坂田記念史料室の資料を附属図書館の三階に展示させていただくことが決まった。この展示によって、より多くの学生が研究の楽しみや発見の感動に触れ、研究者を目指してくれる事を理学研究科では期待している。展示物は6ヶ月に一度新しいものに変えていく予定である。初回は坂田昌一博士の紹介をテーマとして、博士の 職歴； 湯川秀樹や朝永振一郎との写真等； 坂田模型発見の瞬間を示すノートのコピー； 論文集などを展示した。なお、より詳しい説明はインターネット上の<http://www.sci.nagoya-u.ac.jp/index-j.html>で参照できる。

坂田昌一博士は本理学研究科初期時代から、素粒子物理学の発展方向を示す数々のすぐれた指導的業績を生み出した。博士は1942年に名古屋大学教授として着任された。同年に「2中間子論」を提唱し、今日、第1世代の基本的素粒子と呼ばれている電子および電子ニュートリノの他に、第2世代の基本的素粒子であるミュー粒子とミュニュートリノを導入した。この「2中間子論」は、1947年に実験的に確認されるとともに、その後の素粒子物理学の基本的理論構造の探求における大きな指針となった。1950年頃から60年代初めにかけて多数の素粒子が発見されたが、1955年、博士は唯物弁証法の立場から「物質の階層的構造」を強調して、現象的規則性の背後に物質的存在があるとして、



後ほどクォーク模型となる「坂田模型」と呼ばれる素粒子の複合模型を提唱した。さらに、1962年には「新名古屋模型」を提唱して、電子ニュートリノとミュニュートリノ間の「ニュートリノ混合」の可能性を指摘し、2世代模型やニュートリノの振動・質量の問題に先駆的業績を残した。

現象の背景には物質的基盤があるという坂田博士の思想は坂田博士門下にも引き継がれ、第3世代のクォークの存在が理論的に必要であるという「小林・益川理論」を生み出した。

博士は第2次大戦中から研究体制作りを進め、それは戦後自由闊達な独創的研究を推進する研究体制として結実した。のみならず博士は核兵器廃絶と平和の創造を含めた科学者の社会的取り組みの推進にも大きな貢献をなした。

(さんだ いちろう・理学研究科教官)

お知らせ

11月の休館日の変更

平成11年11月21日は全学的に停電となることになり、中央図書館は21日に開館することになっていましたが、21日は休館とし、14日を開館することになりました。

国立国会図書館所蔵明治期刊行図書マイクロ版集成：「教育」部門

「教授法・各科教育」分野 第84-109リール マイクロフィルム

国立国会図書館が所蔵する明治期刊行の教育図書群のうち「教授法・各科教育」分野の図書をマイクロ化したもので、平成7年度からの継続。

文章世界 第1 - 16巻 (明治39 - 大正10) マイクロフィッシュ

明治大正期の代表的な文学雑誌のマイクロ版。

Cosmopolis: an international monthly review. Vol. 1-12 (1896-1898) 復刻版

19世紀末の国際的総合文芸誌の復刻版。

Early English Books, 1475-1640 (STC I). Unit 62. マイクロフィルム

1475-1640年までの間に英国内で出版されたもの、及び英国外で刊行された英語文献のマイクロ版。

Documents on education development. East Asia, South-East Asia. マイクロフィッシュ

発展途上国の教育に関する調査研究の公式資料集。

Protokolle des Vermittlungsausschusses des Deutschen Bundestages und des Bundesrates.

(1) 1.-11. Wahrperiode 1949-1990 (2) Ergänz. Lfg.: 7.-11. Wahrperiode

マイクロフィッシュ

西ドイツの両院協議会議事録のマイクロ版。

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●● [国内図書館関係日誌] ●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●

- 10.10.14 第31回国立七大学附属図書館部課長会議(於：京都大学) 出席者：田村事務部長、三池情報サービス課長
- 10.10.15 第72回国立七大学附属図書館協議会(於：京都大学) 出席者：戒能館長、田村事務部長、三池情報サービス課長
- 10.10.30 第45回国公私立大学図書館協力委員会(於：東京大学) 出席者：田村事務部長
- 10.11.4 国立大学図書館協議会と学術情報センターとの業務連絡会(於：東京大学) 出席者：田中情報システム課長
- 10.11.5-6 国立大学図書館協議会常務理事会、著作権特別委員会、協議会賞受賞者選考委員会、海外派遣者選考委員会、理事会(於：東北大学) 出席者：戒能館長、田村事務部長、木村情報管理課長
- 10.12.7 国立大学図書館協議会と国公私立大学図書館協議会との日米ラウンドテーブルについての合同会議(於：東京大学) 出席者：田村事務部長
- 10.12.9 文部省による大学図書館ヒアリング(於：名古屋大学)
- 10.12.9 平成10年度東海地区国立大学図書館協議会事務連絡会(於：名古屋大学) 出席者：田村事務部長、木村情報管理課長、三池情報サービス課長、田中情報システム課長、本多情報管理課課長補佐、中井情報サービス課専門員、臼井情報システム課専門員
- 10.12.16-18 N A C S I S - I R 地域講習会担当者連絡会議(於：学術情報センター) 出席者：鈴木参考調査掛長
- 11.1.18-20 I L L 地域講習会担当者連絡会議(於：学術情報センター) 出席者：堀木相互利用掛長
- 11.1.21 国立大学図書館事務部長会議(於：三重大学) 出席者：田村事務部長
- 11.2.22 国公私立大学図書館協力委員会(於：東京大学) 出席者：田村事務部長

..... 【学内動向】 <10.10.6-11.4.5>

会議

- ・第10-6回学術情報事務連絡会<10.23>
 - ・第10-5回蔵書整備委員会<10.29>
 - ・第10-5回電子図書館推進委員会<10.29>
 - ・第10-3回図書館システム検討委員会<11.26>
 - ・第10-7回学術情報事務連絡会<11.27>
 - ・第10-6回電子図書館推進委員会<11.27>
 - ・第10-4回商議員会<12.8>
 - ・附属図書館将来構想について
 - ・平成10年度図書購入費予算の補正について
 - ・第10-8回学術情報事務連絡会<12.18>
 - ・第10-7回電子図書館推進委員会<12.22>
 - ・第10-8回電子図書館推進委員会<1.21>
 - ・第10-8回学術情報事務連絡会<1.22>
 - ・第10-6回蔵書整備委員会<1.28>
 - ・第10-4回図書館システム検討委員会<2.2>
 - ・第10-5回商議員会<2.2>
 - ・次期附属図書館医学部分館長の選考について
 - ・名古屋大学附属図書館中央図書館利用細則の一部改正について
 - ・附属図書館将来構想について
 - ・平成12年度概算要求事項について
 - ・平成11年度附属図書館調査研究室調査研究員の委嘱について
 - ・平成11年度図書資料(大型コレクション)収書計画及び自然科学系特別図書収書計画について
 - ・その他
 - ・第10-2回和漢古典籍整理専門委員会<2.22>
 - ・第10-9回電子図書館推進委員会<2.25>
 - ・第10-9回学術情報事務連絡会<2.26>
 - ・第10-5回図書館システム検討委員会<3.16>
 - ・第10-6回図書館システム検討委員会<3.23>
 - ・第10-7回蔵書整備委員会<3.23>
 - ・第10-6回商議員会<3.23>
 - ・附属図書館将来構想について
 - ・平成11年度電子図書館推進委員会専門委員について
 - ・増築後の資料移管に伴う要員措置について
 - ・次期商議員会の体制について
 - ・その他
 - ・第10-10回学術情報事務連絡会<3.26>
 - 研修・講習会等への参加
 - ・第18回西洋社会科学古典資料講習会(於:一橋大学)<10.13-16> 出席者:今枝文子(経)
 - ・平成10年度第2回総合目録データベース実務研修(於:学術情報センター)<10.19-11.6> 出席者:棚橋是之(中)
 - ・東海地区大学図書館協議会平成10年度第1回研修会(於:名古屋大学)<10.26>出席者81名
 - ・平成10年度大学図書館職員講習会(於:京都大学)<11.9-12> 出席者:渡邊通江(中)
 - ・EDC図書館員トレーニングセッション(於:駐日欧州委員会代表部)<11.18-20>出席者:小倉文子(経)
 - ・第11回国立大学図書館協議会シンポジウム(於:広島大学)<11.25-26>出席者:堀木和子(中)
 - ・学術情報センター新IR,CAT/ILLシステム説明会(於:名古屋大学)<12.1>出席者 IR:126名 CAT/ILL 136名
 - ・東海地区大学図書館協議会平成10年度第2回研修会(於:岐阜経済大学)<12.16>出席者:夏目弥生子(中)
 - ・第2回附属図書館研修会(於:名古屋大学)<2.23>出席者:46名
- 人物往来
- <ご多幸を祈ります> - 退職された人 -
- 杉戸聖子(農学部図書掛) 2.28
 - 岡田恵子(附属図書館医学部分館閲覧掛) 3.30
 - 近藤立夫(情報管理課会計掛主任) 3.31
 - 秋田美穂(情報管理課図書受入掛) 3.31
 - 吉崎筆子(情報システム課雑誌掛) 3.31
 - 桜井満壽子(理学部図書掛) 3.31
 - 今村佳代子(医療技術短期大学部図書掛長) 3.31

<ご健闘を期待します> -他機関へ配置換になった人-
田中榮博 (九州大学附属図書館情報サービス課長へ) 1.1 (情報システム課長から)
臼井克己 (鳴門教育大学教務部図書課長へ) 4.1 (情報システム課図書専門員から)
石田康博 (岐阜大学附属図書館情報管理課資料受入係長へ) 4.1 (情報システム課目録情報掛より)
川添真澄 (三重大学附属図書館情報サービス課資料運用係長へ) 4.1 (工学部・工学研究科総務課図書掛より)

<はじめまして> -他機関から配置換になった人-
小花洋一 (情報システム課長) 1.1 (横浜国立大学附属図書館情報サービス課長から)
豊田明 (情報サービス課閲覧掛長) 4.1 (三重大学附属図書館情報管理課図書情報係長から)
加藤信哉 (情報システム課図書専門員) 4.1 (東京大学附属図書館情報サービス課運用主任から)
山本利幸 (情報システム課目録情報掛) 4.1 (豊橋技術科学大学教務部図書課情報サービス係から)

<はじめまして> -新しく採用された人-
愛場美和子 (情報サービス課閲覧掛) 4.1
小林恵子 (情報サービス課相互利用掛) 4.1
井原智子 (経済学部図書掛) 4.1
朝倉佳子 (経済学部図書掛) 4.1
石川美知 (農学部・生命農学研究科図書掛) 4.1

<これからもよろしく> -配置換等になった人-
濱島聡 (情報管理課庶務掛長) 4.1 (医学部附属病院総務課職員掛主任から)
横田佳子 (情報管理課会計掛長) 4.1 (大型計算機センター会計掛長から)
久米早苗 (情報管理課会計掛) 4.1 (理学部・理学研究科・多元数理科学研究科経理掛から)
久宗順子 (情報サービス課参考調査掛長) 4.1 (経済学部図書掛長から)
小林祐二 (情報システム課システム管理掛) 4.1 (大型計算機センター第二業務掛から)
萩誠一 (情報システム課目録情報掛) 4.1 (医学部分館整理掛から)
小倉文子 (医学部分館整理掛) 4.1 (経済学部図書掛から)
森田友久 (文学部図書掛長) 4.1 (理学部図書掛長から)

河合成典 (経済学部図書掛長) 4.1 (文学部図書掛長から)
菊池有里子 (経済学部図書掛) 4.1 (情報サービス課相互利用掛から)
鈴木康生 (理学部図書掛長) 4.1 (情報サービス課参考調査掛長から)
岩月肇 (工学部・工学研究科経理課管理掛長) 4.1 (情報管理課会計掛長から)
大矢節子 (農学部専門職員) 4.1 (情報管理課庶務掛長から)
次良丸章 (国際開発研究科事務掛) 4.1 (情報システム課目録情報掛から)
奥村小百合 (大型計算機センター第二業務掛) 4.1 (情報システム課システム管理掛から)
八田和子 (医療技術短期大学部図書掛長) 4.1 (情報サービス課閲覧掛長から)
規定等制定・改正

・名古屋大学附属図書館中央図書館利用細則 (11.4.1改正)

・「教育学部図書室利用要綱」を部内規定として制定 (10.11.25教授会決定、11.4.1実施) 部局動向

・教育学部：「旧制学校一覧」の一部 (340冊) を乾式アンモニア・酸化エチレン法による脱酸性化処理を実施

・理学部：生命理学科図書室発足 (旧生物学科図書室と旧分子生物学科図書室が合同)

・農学部：農学部図書室ホームページからの文献複写・貸借申込サービス開始 (学部内者のみ対象)

編集委員会

三池慎三郎 (委員長)、井道哲志 (中)、原系子 (中)、加藤信哉 (中)、宮田和佳 (文)、井原智子 (経)、杉浦司 (医)、岡田智行 (医短)

